整理番号	受付年月日	相談者	相談方法
1－1－5	2017.3.1	匿名	直接

質問内容

最近、21 世紀以降は地球温暖化が頭打ちになっているのではないかと考えられるようになってきていると聞きます。そうすると IPCC の報告は間違っているという事になるのでしょうか。教えて下さい。

回　答

2013 年に公表された IPCC（気候変動に関する政府間パネル）の第5次評価報告書は、最近 15 年間（1998～2012 年）の地球の平均地上気温の上昇率が、それまでの半世紀に比べて顕著に鈍って見えることを示し、その原因が、1998 年に起こった観測史上最大のエルニーニョ（年単位で気温が高めに出やすくなる）と、それ以降の短期間でトレンド（気温変化の傾向）を見積もったことにあるとしました。

この鈍りを温暖化傾向の停滞と捉えた科学者たちは、これを**ハイエイタス**（「ひび」や「すき間」の意）と呼び、その原因を説明する幾つもの仮説が提唱されてきました。

日本でもこの問題に関して盛んに研究されており、東北大（木津准教授）は、IPCC が認めた温暖化傾向の鈍りそのものが、観測データの不足やバイアス（系統的な誤差）に起因する事実誤認だったのではないかと主張しています。過去の解析では主に海面水温の測定方法の変遷に由来するバイアスの補正が不十分であったとして改良を加え、データを選別し直し、陸域の地上気温の算出方法を改めるなどして、観測史上最も暑かった 2014 年まで含めて解析し直した結果、これまでハイエイタスとされていた期間も含め、前世紀半ば以降の温度上昇率に鈍化は見られないと結論づけています。

また、気象庁気象研究所（石井主任研究官）は、観測のバイアスや気温推定誤差は長期温暖化トレンドに比べて著しく小さいため、今後データが修正されることがあるとしても、過去の温暖化傾向は事実として残るとし、補正の有無にかかわらず明白な温暖化の傾向を確認することが出来るとしています。論文中で 2000 年～2014 年の温度変化の傾向はそれ以前のものと大差なくなったため、温暖化停滞説を支持しないと結論付けています。

東大の大気海洋研究所（渡部准教授）は、新たに導入した海面水温データの補正を用いると、IPCC の第 5 次評価報告書(AR5)で述べられているような「1998 年～2012 年における、地球全体の気温上昇の停滞現象(ハイエイタス)が見られなくなる」としています。つまり、「ハイエイタスというのは不完全なデータがもたらした幻想である」といった趣旨です。

以上の如く、従前の IPCC の研究を含めた研究成果に海水温その他の採用データの修正や研究手法やシミュレーション方法の精緻化により、停滞はあり得ないと結論に達している様です。今後も様々な研究成果をウォッチしてゆく必要はあるものの、現在の所 IPCC の見解は正しく地球温暖化は進んでいるとみるのが世間の常識の様ですね。“COOL　CHOICE” しましょう！

参　考

IPCC 報告書：http://www.data.jma.go.jp/cpdinfo/ipcc/ar5/ipcc_ar5_wg1_ts_jpn.pdf
サイエンスメディアセンター：http://smc-japan.org/?p=4024
東京大学大気海洋研究所：　http://www.aori.u-tokyo.ac.jp/research/news/2014/20140901.html